

# SSSB News Letter

No. 18 Jan. 1999

種生物学会30周年記念 国際シンポジウム 植物集団の進化生物学 21世紀に向けての新しい展望 (矢原徹一)	2
会長からみなさんへ (矢原徹一)	6
コラム/会員登録, 会員情報変更 (西野貴子)	7
コラム/電子メールについてのお願い (西野貴子)	7
種生物学会 総会報告 (矢原徹一/西野貴子)	8
寄稿/種生物学シンポジウムの印象記 学会再生か? 学生会員入会の嵐 (西脇亜也)	12
種生物学シンポジウムに初めて参加して (中島加奈子)	14
第30回種生物学シンポジウム・ポスター発表リスト	15
Plant Species Biology 編集状況 (河野昭一)	16
種生物学研究 編集状況 (川窪伸光)	16
種生物学会では年会費を前納で (西野貴子)	17
2000年度から会費の会計 (西野貴子)	18
会員勧誘の御協力を! 学生会員3000円! (西野貴子)	18
新装和文誌の予定内容	19

種生物学会ニュースレター  
種生物学会和文誌編集委員会編集  
The Society for the Study of Species Biology

The International Symposium for  
the 30 Years Anniversary of the SSSB



Plant Population Biology and Evolution:  
New Perspectives toward a New Century



April 2, 1999

9:00-12:00

**Opening lectures:** "New Perspectives of Plant Population Biology and Evolution"

D. Futuyma:

"Contemporary Approaches to the Coevolution of Plants and Herbivores"

K. Bachmann:

"Molecules, Morphology and Maps: the Genetics of Species Maintenance"

S. Kawano:

"Evolutionary Biology of Plant Species: Comparative Life Histories and Implications of Evolutionary Ecological Approaches"

13:30-17:30

**Session 1:** "Plant-pollinator Interaction as a Model System of Coevolution"

J. D. Thomson:

"Pollen Presentation and Pollination Syndromes, with Special Reference to Penstemon"

T. de Jong:

"From Pollen Dynamics to Adaptive Dynamics"

M. Morgan:

"Evolution of Coevolution Between Plants and Their Pollinators"

S. Sakai:

"Size-number Trade-off and Allocation to Flower Production in Animal-pollinated Plants"

K. Suzuki:

"Generalization and Specialization in Pollination Systems of Bumblebee pollinated Plants"

**April 3, 1999**

**9:00-12:15**

**Session 2: "Evolutionary Biology of Speciation"**

A. Templeton:

"Gene Trees: A Powerful Tool for Exploring The Evolutionary Biology of Species and Speciation"

C. Haufler:

"Modes and Mechanisms of Speciation in Pteridophytes: Implications of Contrasting Tempos in Temperate and Tropical Habitats"

N. Murakami:

"Species Recognition of Morphologically Simple Ferns Based on Molecular and Ecological Information"

K. Sawamura:

"Genetics of Hybrid Inviability and Sterility in *Drosophila*"

**13:30-18:00**

**Poster session**

**April 4, 1999**

**9:00-12:15**

**Session 3: "Demographic Genetics of Size-structured Populations and Metapopulation Models "**

B. K. Epperson:

"Spatial Genetic Structure and Non-equilibrium Demographics within Plant Populations."

I. Olivieri:

"Contribution of Metapopulation-level Genetic, Demographic, and Evolutionary Studies to Plant Conservation Biology"

K. Kitamura:

"Demographic Genetics and Evolution of the Japanese and American Beech Populations"

T. Herben:

"Spatial Heterogeneity, Species Interactions and Genetic Variation in Clonal Grasses: Field Evidence"

**13:30-15:00**

**Discussion & Concluding remarks**



種生物学会 30 周年記念 国際シンポジウム

# 植物集団の進化生物学

## 21 世紀に向けての新しい展望

種生物学会国際シンポジウム組織委員会

委員長 矢原徹一 (種生物学会会長・九州大学)

副委員長 村上哲明 (京都大学)

先の 2 ページにプログラムを示しました種生物学会 30 周年記念国際シンポジウム「植物集団の進化生物学 — 21 世紀に向けての新しい展望」を下記の予定で開催いたします。

今回の国際シンポジウムでは、植物の進化生物学で現在最も注目を引いている 3 つのトピックを取り上げます。また、D. フツイマ、K. バックマン、A. テンプルトンをはじめ、植物分野に限らず進化生物学において主導的役割を果たしている第一線の研究者をスピーカーに迎えて、最新の成果の発表・議論が展開されます。ポスターセッションの時間も設けてありますので、若手研究者にとっては自分達の研究成果を直接、世界最前線の進化生物学者に伝えるチャンスでもあります。

なお、ポスター発表は学会員に限らせていただきますが、シンポジウム、懇親会の登録・参加、宿の手配に関しましては、学会員、非会員の区別なく、お世話させていただきます。この時期は桜の花で古都・京都が最も華やか時期でもあります。種生物学会の会員だげにとどまらず、大勢の方の参加を期待いたします。

### 1. 開催期間

1999 年 4 月 2 日 (金) ~ 4 日 (日)

### 2. 会場

京大会館

〒606-8305

京都市左京区吉田河原町 15-9

TEL 075-751-8311 FAX 075-751-5403

### 3. 登録費

(種生物学会員、非会員を問いません)

2 月 28 日までに申込の場合

一般 15,000 円 学生 10,000 円

3 月 1 日以降

一般 17,000 円 学生 11,000 円

### 4. 懇親会 (学会員、非会員を問いません)

4 月 3 日 (土) 夜、

同じく京大会館にて懇親会を開きます。

会費は以下のとおりです。

2 月 28 日までに申込の場合

一般 8,000 円 学生 5,000 円

3 月 1 日 ~ 3 月 15 日に申込の場合

一般 9,000 円 学生 6,000 円

### 5. ポスター発表

(発表者は種生物学会員に限ります)

4 月 3 日 (土) 午後がポスターセッションに当てられます。50 枚のポスター用パネル (W 900 × H 1,820 cm) を準備する予定です。ポスター発表 (発表言語は英語のみとします) にも奮ってご参加ください。なお、発表

希望者が50名を超えた場合は申込順の早い方を優先させていただきます。

ポスター発表申込の締切  
2月28日

発表申込をされた方は、同時に所定の書式のアブストラクト(英語)を村上哲明宛(アドレス k53870@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp)に、できるだけe-mailでお送りください。メールのタイトルはSSSB ABSTRACT(半角大文字)としてください。

メールが使用できない方は、発表申込書と一緒にフロッピーディスク(アブストラクトのテキストファイルを含む)を村上宛にお送りください。アブストラクトの送付期限(e-mailの場合も同様)も2月28日とさせていただきます。

6. 問合わせ先

本国際シンポジウムに関してご質問のある方は下記までご連絡ください。

〒812-8581  
福岡市東区箱崎6-10-1  
九州大学理学部生物学教室  
矢原徹一  
e-mail: tyahascb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp  
Fax 092-642-2645

7. 参加申込書、

ポスター発表申込書の送付先

シンポジウム及び懇親会の参加申込・ポスター発表申込は、同封の申込用紙(コピー可)に必要な事項を記入のうえ、下記に郵送してください。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学大学院理学研究科植物学教室  
種生物学会国際シンポジウム事務局  
代表者 村上哲明  
e-mail:  
k53870@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp  
FAX 075-753-4145

8. シンポジウム登録費、懇親会費送金先

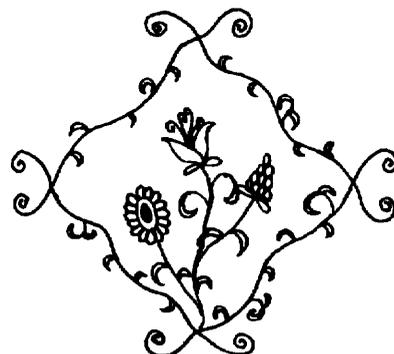
同封の郵便振替用紙をご利用ください。

郵便振替口座 00920-9-138030  
口座名称「種生物学国際シンポジウム」

9. 宿泊

一般参加者用としてシンポジウム会場に近い大学共済の宿(御車会館・くに荘)を120人分押さえてあります。入る部屋のタイプにもよりますが、1泊 3500円~5000円ぐらいで宿泊できます(ただし、基本的に和室・相部屋になります)。桜の時期の週末に京都で宿を確保するのは至難の業です。どうぞご利用ください。宿の手配をご希望の方は同封の宿泊申込書(コピー可)にご記入のうえ、できるだけシンポジウムの申込と一緒に下記に郵送してください。宿を手配できる人数には限りがありますので、定数を超えた場合は種生物学会員、非学会員の区別なく、申込順とさせていただきます。できるだけ早めにお申し込みください。宿の申込締切も2月28日とさせていただきます。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学大学院理学研究科植物学教室  
種生物学会国際シンポジウム事務局  
代表者 村上哲明  
e-mail:  
k53870@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp  
FAX 075-753-4145



# 会長からみなさんへ

種生物学会会長  
矢原徹一

いよいよ20世紀最後の年となりました。前回のニュースレターでもご紹介したように、種生物学会では21世紀に向けて、いくつもの改革を進めています。一つは英文誌のBlackwell社への業務委託です。契約をめぐって細部にわたる交渉を進めていましたが、正月明けに最終的な合意に達し、むこう3年間についての契約書にサインをしました。決済通貨であるオーストラリアドルの換算レートの変動（値下がり）などのため、当初の見積もりよりも財政的な負担が増える可能性があります。ただし、財政的な問題は、部数が今

後どれだけ増えるかによって変化します。双方の努力（国外での販売部数・国内会員の拡大）によって、早い時期に財政的安定が実現できるものと考えています。

◇

14巻第1号の原稿は、すでにBlackwell社に送付しました。したがって、早ければ4月中に新しいスタイルのPlant Species Biologyをみなさんにお届けできるはずですが、今後は年3回、確実に雑誌を発行しなければなりません。そのためには、良い原稿がコンスタントに投稿されることが必須です。もとより英文誌は、種生物学会会員の研究を国際的に発表する場として発行されたものです。会員の中で海外の雑誌への投稿が増えるに従い、英文誌の魅力が低下しているという現実がありました。Blackwell社への業務委託によってこの点は飛躍的に改善さ

れると考えています。ぜひ、会員の方々から、多くの投稿をいただけるよう、お願いいたします。海外の雑誌に投稿した場合、データの質は良くてドキュメンテーション（論述）や英語の出来が悪いためにリジェクトされることがしばしばあります。PSBでは海外の一流の研究者に対して内容重視の丁寧な審査を依頼し、それを実現してきた実績があります。この伝統を生かして、これまで以上に丁寧でなおかつ水準の高い審査が行われるよう、配慮していきたいと考えています。

◇

PSBの海外へのアピールを行うことも考えに入れて、4月2-5日には国際シンポジウムを開催します。「進化生物学」の著者フツイマ博士をはじめ、国際的に見てトップクラスの研究者を招聘しています。ぜひご参加ください。このシンポジウムの内容は、PSB、14巻3号に掲載されます。英文誌と同時に、和文誌についても大改革を行い、より魅力的な会誌をめざします。この改革の進行状況については、川窪編集委員長の記事をご参照ください。

◇

年1回開催されるシンポジウムは、会員の交流の場として、本学会にとっては決定的な重要性を持っています。種生物学会の大きな魅力は、種生物学シンポジウムのおもしろさと楽しさにあると言っても過言ではないでしょう。第30回の記念の年に当たるシンポジウムは、国際シンポジウムとは別に、堀田先生のお世話で鹿児島大学で開催しました。地理的に不便な場所で開催したにもかかわらず、92名の参加があり、熱気にあふれたシンポジウムでした。懇親会と同時にポスターセッションを行うことについては賛否両論がありましたが、ポスター発表者は食事になかなかありつけないほど、活発な議論が行われました。アカデミックな懇親会となり、成功だったと思います。今後も準備に当たる実行委員の方々の協力を得て、魅力あふれるシンポジウムを開催していきたいと思ひます。

◇

総会報告にあるように、2000年度から一般会

員の会費を10,000円に値上げすることが決定されました。ただし、学生は5000円に据え置き、さらに初年度は3000円に割引をする方針が承認されました。この改正の効果は早くも現れ、学生会員数は総会以後倍増しました。学生会員数は、学会の活力を左右します。初年度3000円で、英文誌3冊、和文誌、ニュースレターが受け取れるという魅力を広くご宣伝いただき、学生会員の拡大にご協力ください。一般会員の方々には、学生会費を据え置くために2000円の会費増をお願いせざるを得ませんが、若い会員を育てるという方針にご理解いただき、なにとぞご協力ください。



英文誌・和文誌の大改革の時期にありながら、1999年度の会費を据え置くことは、予算編成上はかなり厳しい選択でした。総会で承認された予算は、次年度繰り越し金がわずか10893円というものです。この提案は、英文誌・和文誌の改革の成果をご覧いただいた上で、会費値上げにご協力いただきたいという執行部の考えによるものです。この予算で赤字を出さないためには、会費を滞納されている会員の方々に、滞納会費を完納していただく必要があります。会費の滞納は、ご本人の責任とばかりは言えず、適切な連絡を怠ってきた執行部にも責任があります。今後、メールなどを通じて滞納額・支払い方法を個々に連絡させていただきます。速やかな納入にご協力いただけるよう、お願いいたします。

電子メールの普及にともない、メールでの迅速な情報提供にも積極的に取り組んでいきます。アドレスの確認作業を進めていますが、まだ完全ではありません。アドレスをお持ちの方で、メールによる本学会からの情報が届いていない方は、会計担当の西野までご連絡ください（\*ページ参照）。



1999年が種生物学学会の飛躍の年となるよう、みなさまのご協力を重ねてお願いいたします。

## 会員登録、 会員情報変更についてのお願い

会費納入や会誌発送などの管理を行うため、会員登録には以下のような情報が必要です。入会御希望の際には以下の項目について会計幹事の方までお知らせください。また変更が生じた場合にも御連絡をくださいますようお願い致します。

- (氏名)
- (ふりがな)
- (会員種別)：学生か一般か
- (所属)
- (所属住所)：できれば郵便番号も
- (会誌発送先)：所属の場合、記入はいりません
- (電話)：
- (ファックス)：
- (メールアドレス)：お持ちの場合

御不明な点などございましたら以下の会計幹事まで御連絡ください。

会計幹事 西野貴子  
 nishino@el.cias.osakafu-u.ac.jp  
 〒599-8531 堺市学園町1-1  
 大阪府立大学総合科学部  
 FAX：(1999年3月まで) 092-642-2645  
 (1999年4月以降) 0722-54-9932

## 電子メールを お使いになれる方への お願い

電子メールの普及が急速に進み、昨年度から2回ほど種生物学学会でもニューズレターに先駆けて電子メールでの連絡を行うことができました。しかし、アドレスをお持ちの方でも御登録をお忘れの方やアドレスがちがう方がいらっしゃるようです。1999年1月12日に矢原会長から「国際シンポジウム」というメールがニューズレターに先立ち連絡されましたが、アドレスをお持ちの方は受け取られたでしょうか。もし受け取っていないという方がおられましたら、お手数をお掛けいたしますが nishino@el.cias.osakafu-u.ac.jp まで「種生物学アドレス」というメールをお送りください。また会員情報の登録・変更や各種問い合わせなども電子メールですと早く対応できる場合が多く、登録時の間違いも極力少なくなります。御協力をお願い致します。

# 種生物学会 総会報告

1998年12月20日  
第30回種生物学シンポジウム会場  
鹿児島大学理学部

## 1. 庶務報告

矢原会長から以下の3項目について報告があり、了承された。

1) 植物分類学関連学会連絡会での活動報告  
合同名簿作成への参加は見合わせた。次年度植物学会大会(東北地区)での、シンポジウム企画を引き受けることになった。東北大学に異動された牧雅之元幹事に、アレンジをお願いした。

2) 自然史学会連合 科研費時限枠「自然史科学」の審査員の推薦を求められ、幹事からの推薦をもとに矢原会長が、2名を推薦したが、最終的には審査員候補に選出されなかった。

3) 牧雅之氏の人事異動により、九州地区幹事は堀田満氏にお願いすることになった。

## 2. 審議事項報告

西野会計幹事から、決算の詳細な報告があり承認された。また、来年度予算については、決算の詳細な検討と、学会の新方針(英文誌出版委託と、和文誌の出版形態の変化)について、矢原会長と西野会計幹事からの説明があり、学会運営の今後の見通しが議論され、会費値上げについても、審議され、その後、承認された(「会長からみなさんへ」のページ参照)。

### 1) 1998年度決算(資料1)

西野会計幹事の解説:

1998年12月17日に会計監査委員である巖佐庸、大橋一晴両氏に収支決算報告書、内訳明細、通帳類、伝票類を照合、監査いただいた決算報告は、シンポジウムにおける総会で承認されました(次ページ資料1)。

資料1では、会計がどのように執行されているか御理解の一助になるよう、1998年度予算、また昨年度1997年度の決算と比較した欄を設けてあります。この欄にあります金額は、増減額を示していますので御注意ください(減額の場合には数字の前に△がついています)。

収入の部で予算からの大きな減額が見られるのは、その大部分が会費と購読料収入によるところが大きいことが明かです。この理由につきましては海外購読等の会費納入の遅れ(総会の時期が早まったため)、会費滞納者の未納入分の持ち越しが主な理由です。河野昭一氏より昨年のシンポジウム時に御著書の売り上げを学会に御寄付いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。著作権配当金は学術協会から毎年配当金が入ってきていますが、97年度分が遅れたために、98年度の決算報告には、97年度と98年度の2年分をあわせて報告してあります。

支出の部については、予算と較べた場合、印刷費と通信費(会誌発送代)が減額、すなわち余剰があったように数字の上ではなっていますが、これは予定していたPSB vol.13(2-3)号の出版が遅れているためであり、実質的にはどちらも増減がないものになります。英文誌編集事務補助謝金のところで予算に対して減額ですが、1998年12月分が未支払のため、こちらも予算に対して増減はありません。これら収支の結果、2,211,869円が1999年度に繰越されます。



1998年度決算報告書 (1998.1.1-1998.12.16) と予算, 昨年度決算に対する増減の比較

1998年度決算報告書 収入の部		1998年度決算報告書 支出の部		増減額	
科目	金額	今年度予算	今年度決算	科目	金額
会費	2,925,622	△1,232,378	△273,719	印刷費	2,645,002
購読料	134,000	△516,000	△532,942	PSB Vol.12(2-3)	1,521,408
バックナンバー	42,975	△7,025	△8,309	PSB Vol.13(1)	687,277
別刷り	970,460	470,460	420,364	種生物研究21	416,000
預金利子	1,967	△1,033	△396	Newsletter No.17	20,317
寄付	121,715	***	121,715	通信費	168,330
著作権配当金	97,410	***	97,410	会誌発送 PSB12(2-3), 種21	107,020
				会誌発送 Vol.13(1), NL	61,310
				事務費	259,088
				和文誌編集	8,840
				英文誌編集	173,723
				その他	76,525
				英文誌編集事務補助謝金	662,400
小計	4,294,149	△1066851	△181526	英文校閲	77,000
				雑費	22,640
				自然史学会連分担金	20,000
				監査交通費	2,640
前年度繰越金	1,752,180	0	848625	小計	3,834,460
合計	6,046,329	△1066851	667099	次年度繰越金	2,211,869
				合計	6,046,329

△減額

△減額  
\*\*\* 該当項目なし

## 2) 1999年度予算(資料2-3)

西野会計幹事の解説:

幹事会で審議された予算案は、総会にて無事承認いただいたので御報告します。

収入の部で、会費収入は次のように算出しました(資料2)。決算報告にもあるように、これまでの滞納分による会費の減収は会計執行にとって大きな負担となっています。97年度までの(滞納)会費の70%、98年度、99年度の滞納会費の100%の回収を前提として予算案を作成しました。97年度以前の滞納者の方については70%という目標に留めましたが、もちろん最大限100%の回収ができるよう、努力する考えです。会員の会費納入状況を調べると(資料3参照)、1994年度まで払っている方、すなわち1995年度分からは支払われていない方は、一般会員には7名おられます。同様に1995年度までしか払われていない方は6名、というように、一般と学生会員にわけると資料3の表のようになります。各年度ごとに1999年度分会費までの未納入額を人数にかけて、さらに先に設定した目標回収率をかけます。このように今年度に納めていただく会費の総額が算出されたのですが、このままでは予算項目としてわかりにくいので、この試算総額を一般会員と学生会員のそれぞれの1999年度会費と1998年度までの未納分にまとめました。

このほか、収入の部では、毎年、学術協会から著作権配当金として平均45,000円程度が本学会の方へ入ってきていますので、昨年度からは予算として計上しました。また去年度予算までは購読料、別刷り代を計上してきましたが、PSBの出版社への業務委託にともない、予算の収入の部からはずしました。その他の項目については例年どおりです。

支出の部についてですが(資料2)、これまでの印刷費、会誌発送費は、和英両雑誌とも出版社に業務委託するために削除されました。代わりに委託にかかる費用を出版社の方へ払い込みます。これらを委託出版費として計上し、和文誌、英文誌とも出版社との交渉額です。また出

版の遅れたPSB vol. 13(2-3)は、従来どおり学会での編集・出版になりますので、予算に計上してあります。ニュースレターの印刷費、発送費については年2回の発行を予定しています(433人×90円×2回分)。そのほか著者、出版社と、または編集委員間でのやりとりに必要な経費として、通信費を和英両雑誌別にあげました。編集業務の出版社へ委託されても、投稿者やレフェリーとのやりとりが必要であり、さらに未発行のPSB vol. 13(2-3)の編集業務も持ち越されているため、英文誌編集に関わる事務補助は必要です。よって英文誌編集事務補助謝金が計上されていますが、1998年度予算から250,000円減額された予算になっています。このほか例年通りの庶務・会計業務にかかる経費、シンポジウム補助金、自然史学会連合分担金が支出となる見込です。

以上のように収入、支出を試算しますと、2000年度への繰越金が10,893円となります。

## 3) 2000年度からの会費値上げ

上記の決算を踏まえ、今後の活動方針を承認したのち(矢原会長の「会長からみなさんへ」参照)、2000年度から一般会員の会費を10,000円に値上げすることが決定されました。ただし、学生は5000円に据え置き、さらに初年度は3000円に割引をする方針が承認されました。



## 資料 2



## 1999年度 種生物学会予算

収入		支出	
会費		委託出版費	
会費 (99年分) 一般	2,936,000	英文誌出版費	3,215,136
会費 (99年分) 学生	130,000	和文誌出版費	550,000
会費 (未納分) 一般	829,600	小計	3,765,136
会費 (未納分) 学生	39,500		
小計	3,935,100	PSB 13(2-3)出版費	
		印刷費	1,400,000
バックナンバー	50,000	発送費	80,000
預金利子	2,000	小計	1,480,000
学術協会著作権	45,000		
		Newsletter印刷費	40000
		Newsletter発送費	77,940
		英文誌関連通信費	160,000
		和文誌関連通信費	10,000
		庶務会計経費	80,000
		英文誌編集事務補助	500,000
		シンポジウム補助金	100,000
		自然史学会連合分担金	20,000
小計	4,032,100	小計	6,233,076
前年度繰り越し金	2,211,869	次年度繰越金	10,893
合計	6,243,969	合計	6,243,969

## 資料 3



会費納入最終年度ごとに人数をまとめると以下のようになり、98、99年度分は100%の納入率  
97年度までの滞納会費は70%の回収率をめざす

	一般会員				学生会員			
	人数	一人当 たりの 滞納額	目標回 収率	総額	人数	一人当 たりの 滞納額	目標回 収率	総額
1994年度まで	7	40,000	0.7	196,000	0			
1995年度まで	6	32,000	0.7	134,400	0			
1996年度まで	38	24,000	0.7	638,400	5	15,000	0.7	52,500
1997年度まで	84	16,000	0.7	940,800	6	10,000	0.7	42,000
1998年度まで	232	8,000	1.0	1,856,000	15	5,000	1.0	75,000
1999年度まで	36	0			3	0		
2000年度まで	1	0			0	0		
合計	404			3,765,600	29			169,500

以上から99年度分の徴収予定会費を当年分と未納分に分けると次のようになる

99年度納入済み	37			3			
99年度未納	367	8,000	2,936,000	26	5,000	130,000	
98年度以前未納			829,600			39,500	

寄稿

第29回・第30回種生物学シンポジウムの印象記

## 学会再生か？ 学生会員入会 の嵐

西脇亜也

(東北大学/東北地区幹事)

第29回種生物学シンポジウムの現地事務局に関わったためか、第30回の印象記を書くことになりましたので、私に関わったこの二つのシンポジウムで受けた印象を書こうと思います。

結果から言うと、私はこれら二つのシンポジウムを大変楽しめたのですが、現地事務局や企画を行う前の私の種生物学シンポジウムへの関心は低いものでした。院生などの若い会員の参加は少なく、活性が低い学会だと感じましたし、生物の進化についての新しい情報や知的興奮は、生態学会で得られるので、わざわざ種生物学シンポジウムに参加するまでもないと感じていたのです。

今は、少し考えが変わっております。種生物学会は、生物学の様々な分野の方が集まって、進化について活発に議論できる、他の学会には無い機会を提供してきたし、これからもそうするならば、この学会の存在意義は十分にあると思っています。今回の総会で決定・確認された、英文誌のBlackwell社への業務委託、和文誌の単行本化、学生会員の初年度会費値下げなどの思い切った改革が可能であったことから、まだまだ生きのびる学会であることが証明されたと思います。

今回のシンポジウム以降、学生会員が大挙して入会したという明るいニュースは、これらの改革の

成功と魅力的なシンポジウムの成果であると信じているものです。

### 1. 第29回種生物学 シンポジウムの印象

第29回種生物学シンポジウムは1998年(平成10年)2月27日から3月1日の3日間、宮城県遠刈田町の蔵王ハイッで開催されました。プレシンポジウムでは、動物の個体群生態学や進化生態学の若き大御所の1人である東北大学の河田雅圭氏による「個体の分散・空間構造と進化」と題した話題提供がありました。

しかし植物の静的な部分を中心に研究されてきた方々の一部にはよくわからないお話と受け取られたのは残念でした。どんな個体が周りにいるのかが、ある個体のふるまいに影響するといった事象は、植物でももっと意識されても良いことだと思います。また、異分野とのバトルロイヤルがこの学会の持ち味だとすれば、もっと議論があるべき内容だと思いました。今の種生物学会の会員は大変おとなしいのかもしれませんが、将来への不安を感じました。

一日目は、「クローン植物研究の最前線」と題したシンポジウムが行われました。極めて多くの植物がクローン成長・繁殖の性質を持ちながら、あまり研究されていないのが現状です。クローン成長・繁殖の進化生態学的な意義についての研究やクローン植物の遺伝変異や集団間分化に関わる研究は、今後の生物学の重要な領域の一つになると思います。

国内3名、国外2名の方々による内外のクローン植物の研究紹介は、この種生物学シンポジウムであまり取り上げられてこなかったテーマであり、多くの驚きの声があがりましたが、同時に植物の個体性に関して戸惑いの声もあがりました。クローン成長をする植物は極めて多く、不可避であるこの

問題を避けてきたためかもしれません。このシンポジウムがクローン植物研究の認知への一歩になれば幸いだと思いました。また今回は海外からの研究者の講演も2題あったため、日本人の講演者も英語で発表されたのですが、国内学会ですので聴衆にとっては日本語の方が良かったのではないかと感じました。

次に2日目の「繁殖生物学の新しい潮流」についてですが、こちらは主に大学院生や若手研究者の方々にご自身の研究紹介をしていただきました。種生物学シンポジウムでしばしば取り上げられる繁殖生物学も変わってきました。最近では、数理的手法や野外での操作実験を道具として駆使しながら研究を進めることが極めて一般的になってきました。問題設定をしっかりとて、大変苦労されながらも独自の測定手法で新知見にせまり成果を挙げつつある皆さんの研究姿勢に好印象を持った人は多かったようです。また、最近では送粉生物学を志す院生の方が多いらしくて、活発な質問が多く出ていました。

### 2. 第30回種生物学 シンポジウムの印象

第30回種生物学シンポジウムは1998年12月18日のプレシンポジウムから19、20日のシンポジウムの3日間、掘田先生らのお世話で鹿児島大学で開催されました。今回は分宿であったため現地事務局の方のご苦労は大変だったと思います。また、従来の宴会式の懇親会を廃止し、パーティー形式での懇親会場でポスター発表が行われたのは、信州の浅間温泉でのシンポジウム以来の企画でアカデミックさを増した企画だったと思います。しかしながら、参加者が飲食と会話に夢中で、ポスター発表者に失礼だったかもしれないと反省しています。もう少し発表者

## 寄稿

## 第29回・第30回種生物学シンポジウムの印象記

への配慮が必要な気がしました。開催時期も従来の2月、3月ではなく12月の開催になり、これなら参加できるとの声が多かったようです。年内の開催は、準備期間の短さに現地事務局や企画が迅速に対処できれば、利点が多いでしょうから今後は定着するかもしれません。

さて、12月18日のプレシンポジウムでは鹿児島大学理学部の山根正気氏による「アジアにおけるアリ類のイベントリー」と題する講演が行われました。昆虫の目録作りはまだまだ途上であり、アリもそうですが、アジアの多くの国との共同研究体制によって、今までは想像もできなかった事実が明らかになりつつある様子を教えてください。山根さんご自身は分類学者ですが、分類学者も分類学だけにこだわらずに生態学などの他分野との共同研究によって新展開が開けるとの指摘は重要だと思いました。

12月19日のシンポジウム「森林植物の繁殖構造と集団分化—分子マーカーの有効性と限界」は、私と金沢大の綿野泰行さんが企画を担当しました。この企画を思いついたのは、第29回シンポの「繁殖生物学の新しい潮流」の総合討論で、司会の酒井聡樹氏が、「今後は生態学と集団遺伝学の融合が必要だと思う」と意見を述べられたのに対して、河野昭一氏が賛意を述べられた時でした。集団遺伝学と生態学の融合をテーマにしたシンポジウムが開催されればぜひ聴きに行きたいと思ったのですが、その機会は案外早く訪れました。最近、森林総合研究所の方々を中心に樹木の生態遺伝学的な研究が発展しており、アロザイム、マイクロサテライト、ミトコンドリアDNA、葉緑体DNA、AFLP、ゲノム情報などの様々な分子マーカーを駆使した研究が進んでいたのですが、種生物学会ではこれらの研究

はあまり知られていないようでした。そこで野外植物集団を研究する際の分子マーカーを正しく使って得られた豊富な成果の発表をしていただきたいと思いました。森林総合研究所の津村義彦さんをはじめとする講演者の方々にはご自身の講演だけでなく企画から大変お世話になりました。その結果、大変まとまった内容になりました。現在、野外植物で有効な分子マーカーを使った手法はほとんど網羅されたのではないのでしょうか？。ねらいである、集団遺伝学と生態学そして分類学などの個別分野にこだわらない進化生物学研究の紹介は一応成功したようです。

「専門領域はあくまでも系統分類学ですが、進化生物学の関連分野（進化生態学、集団遺伝学など）にもちょっかいを出すのを趣味にしている」と日頃言われている京大の村上哲明氏には辛口のコメントをお願いしました。あの村上さんにそんな依頼をすることは命知らずですねと、ある院生の方に言われましたが、村上さんは大変紳士的にコメントされ、講演者の発表のまとめと今後の総合討論のきっかけづくりにいただきました。

総合討論では、雄性繁殖成功の簡便な測定法の開発を期待する発言がありましたが、現状ではまだ困難なようです。このシンポの内容は和文誌の単行本化の第2弾として計画されているのですが、聴衆の多くの方々からは、分子マーカー手法の正しいプロトコル解説を望む声が多かったのが印象的でした。アロザイムにしても日本語の教科書はなく、分子マーカー手法の教科書が多くの方に渴望されている現状が示されたように思います。12月20日のシンポジウム「送粉生物学—最近の動向—」は、第一部が山口県立大の鈴木和雄氏の企画で「送粉昆虫による植物集団の選択」、第二部が信州大

の井上 健氏の企画で「植物の系統進化と適応放散への送粉昆虫の役割」の二部構成でした。

第一部では、花の形態の進化に対して送粉昆虫がいかに関わっているかを、緻密な観察、測定と操作実験で解析した研究の紹介がなされました。受粉成功におよぼす花の形態の違いの効果を検出することを、雌性繁殖成功だけでなく雄性繁殖成功も含めて評価しようとする努力は19日のマイクロサテライトを用いた研究にも関連しており、今後の研究方向を感じさせるものでした(ますます専門化してゆく?)。

第二部では、植物の系統進化に果たす送粉昆虫の役割に関する研究の紹介が行われました。送粉シンドロームにおける花の香りの重要性を指摘する講演では、香りは正しい評価がなされてこなかったことを指摘していただきました。また、ランの多様な受粉の進化ではランによる送粉昆虫の「だまし」が重要な要素であることを勉強しました。

また、植物の種分化と送粉昆虫との関係を、系統樹を用いた比較法で解析する試みがなされ、これらの研究に対して九州大の粕谷英一氏が厳しいコメントをされたようです(恐らく、研究方向はまちがっていないが手法がこなれていないよといったコメントだったのではないかと想像しますが、残念ながら私は聞けませんでした)。この分野も今後発展する要素を多分に秘めているようです。註

私の文章では、この2回のシンポジウムの熱気、特に、若い会員の入会の嵐となったような今回のシンポジウムの印象を十分に伝えきれていませんが、この学会が元気をとりもどしつつある様子が伝われば幸いです。

編集者註：粕谷氏のコメントは、系統樹を使う必要性が疑わしい研究もあるのでは？という、研究の方向性に関しても見直しを迫る厳しいものでした。

寄稿

第29回・第30回種生物学シンポジウムの印象記

## 種生物学 シンポジウムに 初めて参加して

中島加奈子 (学部4年)  
岐阜大学農学部多様性生物学

私は、初めて学会という場に参加しました。私の今後の研究活動には、最近の様々な分野の研究活動を知ることや、自分の研究テーマ以外の研究についての知識を得るために、学会への参加が有意義でした。

しかし、今回の種生物学会への参加には、発表を聴いて多くの情報を持ち帰るだけではなく、ポスターセッションでの発表を、私の指導教官である川窪さんで行うことも含まれていたため、その準備に予想以上の時間を要しました。字の大きさ、ポスターの配色、資料の配置など試行錯誤の繰り返しでしたが、なんとかポスターは完成しました。

種生物シンポジウムへの参加は、私にとって修行に行くようなものでした。学会で多く学べるという期待と、ポスター発表を成功させられるのかという不安と緊張が入り交じっていました。

修行1日目は、鹿児島へ行き、プレシポへの参加です。12月の鹿児島の天候は、岐阜に比べ湿度も気温も高く、セーターを着ていると暑いほどでした。以前から見たいと思っていた桜島

も振り返った私の目の前に大きくそびえ、私は感嘆の声を上げてしまいました。カメラを持参していなかったことが悔やまれます。宿泊するホテルに一度寄り、鹿児島大学を目指しました。二度も迷子になり、7人ほどの人に道を尋ね、鹿児島大学の理学部に到着しました。

プレシポでの、山根先生のヒメサスライアリのお話は、私の知らないアリの世界の話で、興味深いものでした。アリの採集方法や、夜間採集の必要性、ヒメサスライアリの生態などフィールドでの出来事を聴き、今後の調査方法の作戦づくりが始まりました。

そして修行2日目は、シンポジウム1への参加と、ポスターセッションです。ポスター発表の準備と風邪による連日の疲れから、脳みそが頭蓋骨の中で浮いているのではないかと感じられ、あまり集中することが出来ませんでした。途中中座させてもらい、鹿大理学部山根先生を訪ね、アリ研究の現状やアリ標本の管理、私の研究の今後の課題、勉強すべきことについて指導をしていただきました。

また、鹿大理学部博士課程の江口さんには、貴重なアリ標本やアリ標本を作製するところを見せていただきました。彼を見せてくれるアリの形態は非常に多様で、誰もがコレクションしたくなるようなアリ標本ばかりでした。私も美しく見やすい標本づくりを目指し、眺めているだけで飽きない標本箱を完成させたいと改めて思いました。

さて、ポスター発表の直前です。発表の内容から説明する順番まで、もう一度川窪さんと打

ち合わせ、発表練習をしました。

今さらのごとく、私の準備不足を悔やみました。本番を想定して何度も練習しましたが、聴く人に理解されるような説明ができるのか、質問されたときに的確に返答できるのか、不安と緊張で頭の中が混乱するまま、ポスターセッションが始まり、発表を始めました。

説明にはやはり至らないところがあったと思いますが、多くの人に興味を持ってもらえたと思います。「小笠原諸島におけるアリと植物の相互関係」という研究テーマだったのですが、この3日間で様々な視点から見た意見や質問を聴き、今後アリと植物の関係を観察し相互関係の意味する所を探るヒントを得ることが出来ました。

私は学会に初めて参加して、生物学における私の基礎知識不足を危機的に感じました。これからは、学会という情報交換の場を生かし、様々な分野の知識を身に付け、自然界にある現象を総合的に理解する力を養いたいと思います。



記録

第30回種生物学シンポジウム  
ポスター発表リスト  
1998 Dec. 19 鹿児島大学理学部

絶滅危惧植物日本産チョウセンキバナノアツモリソウ（ラン科）の遺伝的分化

井上健（信州大・理・生物）

ミクラザサー斉開花時の1 m<sup>2</sup>あたりの地下茎の構造

小林幹夫（宇都宮大）

テッポウユリとタカサゴユリにおける種内および種間の遺伝的分化

比良松道一（九州大学）・伊井香織・大久保敬・黄光亮・黄志偉

Molecular phylogeny of North American, Asian and European species of *Eupatrium*.

伊藤元己（千葉大学）・喜多陽子・渡邊邦秋・河原孝行・D.J. Crawford・矢原徹一

Sex-biased herbivory in *Arisaema triphyllum* by a specialist thrips, *He terothrips arisaemae*.

Hiroshi Kudoh (Smithsonian Environmental Research Center [SERC], USA), Ilka C. Feller (SERC), Christopher E. Tanner (St. Mary's College of Maryland, USA), and Dennis F. Whigham (SERC)

空間構造がもたらす性配分の偏り

江副日出夫・草深友美（大阪女子大学基礎理学科）

RAPD マーカー法によるヤマモモ集団の構造解析

寺村 丈寿（神戸大学 理学部 生物学科）

日高山脈アポイ岳高山帯の44年間の変化

渡邊 定元（立正大学地球環境科学部）

小笠原諸島における植物とアリの相互関係

中島加奈子・川窪伸光（岐阜大・農・多様性生物学）

DNA sequence (GapC region)を用いたフタバガキ科 *Shorea* 属4種の遺伝的多様性の研究

角 友之（九州大学）

アリ散布植物の海流による種子散布—キケマンの場合

堀田満・川尻裕子（鹿児島大学・理学部）

# Plant Species Biology

英文誌編集委員長  
河野昭一

# 種生物学 研究

和文誌編集委員長  
川窪伸光

現在、刊行が遅れている Plant Species Biology Volume 13, Nos. 2-3, 1998、と新年度1999年より Blackwell-Asia 社より刊行されることになった Volume 14, No. 1, 1999 の編集作業が同時並行で進められています。

Volume 13, Nos. 2-3, 1998は、3月中に会員の皆様にお届けできるよう鋭意努力しています。一方、ニュー・バージョンの Blackwell 社版は、契約条件としては年3回、4月、8月、12月に No.1, 2, 3 を定期的に刊行することが義務付けられています。現在、Volume 14, No. 1, 1999 の分の11編の原稿はすでにオーストラリア・シドニーの編集部に送稿済みであり、予定通り4月に刊行の見込みです。

しかしながら、今後順調な発行を確保するためには、会員の皆様からの活発な投稿が必要です。種生物学会立ち上げから（植物実験分類学研究会を含め）30年目の節目の年に、本格的な国際誌としてスタートできることは大変喜ばしいことですが、定期的に発行し続けるためには、これまでもまして会員の皆様の協力が必要です。

投稿準備原稿、Regular article や Special issue のテーマなどのアイデアをお持ちの方は、下記に是非ご連絡ください。

河野昭一  
京都大学理学部植物学教室  
電話：075-753-4131  
FAX：075-753-4145  
e-mail：k53223@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

●先の総会では新方針の承認ありがとうございました。現在、種生物学会の和文誌は大幅な改革を行っており、次回からの和文誌は、学会員配布と同時に文一総合出版から一般書店店頭で販売する予定です。これは、若手執筆者の研究活動上の利点と、学会活性化を考慮して進めてきた改革で、ぜひとも成功させたいと考えています。●新装初刊は、第29回のシンポの1日分「繁殖生物学の新しい潮流」の講演者を中心として、このニュースレターの最終ページに示したような内容の本「仮タイトル：花生態学の最前線～美しさの進化的背景を探る」を企画しました。1月現在、原稿が続々と寄せられています。従来の和文誌の専門的内容とは異なり、読者層を広げるために（売れるようにするために）、やや「やわらかい」雰囲気を意識して、編集委員会でコメントをつけ、執筆者の方々に御検討をいただいています。なお、最終ページに示したタイトルは書名を含めて仮題です。タイトルは読者への案内板なので、なるべくわかりやすく、魅力的なものにしたいと考えています。当然、原稿がすべてあがった段階で、目次は再検討します。●体裁：◇編者としては、種生物学会編。◇A5版。◇200-250ページ◇ハードカバーを予定。◇インデックスは、今回の企画では力を入れていこうと思っています。◇1章を1人で担当、1章あたり、10000字前後、図写真込みで刷り上がり20ページぐらい。◇解説BOXは、ひとつ1000から4000字程度。基本的に本文を補強する解説にはなりますが、本文とは付かず離れず、堅くなく、エッセイ風に。●対象とする読者・文章レベル：学会員、学部生（1年生も丁寧に読めば十分に理解できる程度）、高等学校の先生。専門書ではなく、学部教育でのサブテキスト的利用が可能なような内容 ●文章様式と内容：◇原著論文の体裁はとらずに、自由にのびのびと。◇だ、である調で統一。◇読者を意識し、わかりやすさを心がける。◇新たな見知のみならず、そこに至る研究過程を意識して、書いていただく。例えば、研究活動における困難や失敗談、そして解決策も。◇とにかく研究活動を続けている原動力・わくわく感を読者に伝えて欲しいと思っています。

## 種生物学会では年会費を前納制でお願いしています。

●1999年度の会費は、一般会員8,000円、学生会員5,000円です。

●各個人の納入状況は、会誌やニューズレター発送時の宛名ラベルの右下に「-数字」という形でお知らせしています。これは「(数字)年度分まで納入済み」を表しています。例えば「-99」とあれば、当年度、1999年度分までの会費はすでに完納していることを示します。「-98」とあれば1998年度まではお支払いただいておりますが、1999年度分は未納ということになりますので、1999年度分会費を御納入ください。また「98+2000」、「97+3000」などの表記がある分は、「(完納している最終年度) + (完納年度の次年度分として支払われている金額)」という意味ですので、御注意ください。例えば、先の「98+2000」は、98年度までは完納してあるが、99年度ぶんは2,000円しかはらわれてませんので不足分の一般会員は6,000円（学生は3,000円）を、「97+3000」とある時は1998年度の不足分（一般ならば5,000円、学生ならば2,000円）と1999年度分の会費を足して御納入ください。

●特に長期滞納の方（ラベルの数字が96以前の方）はお早めにお振込みをお願い致します。

●振替用紙を出版物発送時に同封することもあります。発送作業の軽減化のため、今年度分まで完納いただいている方のところにも一律に同封しています。ラベルに99の数字がある方は振込不要です。

●郵便振替で納入いただいた後に領収証の発行をお願いされる方がおられますが、通常は郵便振替時に郵便局で渡される受領証が領収証として認められます。また、会費納入のトラブルを避けるためにも受領証は御手元に保管ください。

●これまで雑誌発行の遅れなどにより決算額として黒字になっていましたが、1999年度は雑誌の編集業務委託にともないこれまでのような繰越額が残ることは困難な見通しです。予算どおりに会計が執行された場合でもわずか1万円程度しか繰越額が見込めない窮状です。今年度からの和英両雑誌の編集業務委託は学会の将来を左右するほどの重大な改革であり、この改革を進めるためには資金面での問題をも乗り越える必要があります。種生物学会は学会収入のほとんどが会員からの会費によって支えられていることを御理解いただき、下記の郵便振替口座への会費の御入金をお願い致します。なお今回のラベルに記しました納入状況は1999年1月18日までの入金分です。入れ違いにお振込みいただきました場合には御容赦ください。

郵便振替番号：01030-3-21704  
口座名義：種生物学会

●御不明な点などございましたら下記まで御連絡ください。

会計幹事 西野貴子

電子メールアドレス：

nishino@el.cias.osakafu-u.ac.jp

郵便：

〒599-8531 堺市学園町1-1

大阪府立大学総合科学部

ファックス：

(1999年3月まで) 092-642-2645

(1999年4月以降) 0722-54-9932

---

---

## 2000年度からの一般会員会費の値上げにともなう会費の会計

---

---

●総会にて2000年度分からの一般会員の会費は10,000円に値上げすることが承認されたこととともない、会計業務では以下のようにさせていただきます。すでに2000年度分として一般会費を納められた数人の方には大変申し訳ありませんが、1999年度までの会費8,000円との差額をお支払い願います。この場合、発送ラベ

ルには「99 + 2,000」として記入されます。

●またこれまでどおり、一旦納入された会費はお返しができませんので御注意ください。2000年度分もお支払いいただける場合には、一般会員の方は会費の値上げをお忘れずによりしくお願いいたします。西野貴子

---

---

## 会員勧誘の御協力を！ 学生会員3000円！

---

---

●種生物学会にどれくらいの会員がいるのか、御存知でしょうか。

●1998年12月のシンポジウム開催前には国内の一般会員394名、学生会員は30名でした。この数字を見てどのように思われますか。まず驚かれるのは学生会員の少なさではないでしょうか。昔は学生比が他の学会よりも多かったという話を耳にします。そのときの学生会員は月日の経過とともに一般会員になったと思われませんが、フレッシュな学生会員の入会が維持できずに危機的状況にまで減少しました。

●さらに一般会員の数も徐々にです減少傾向にあります。ここ2年ばかりは退職された方の退会希望が増えてきたようです。また、就職し研究機関とは離れた方が継続を希望しない場合も多いようです。若手の野心的で闊達な意見と、ベテランの経験や知識に基づいた議論がシンポジウムなどで交わされるとき、学会員の皆さんは種生物学会の魅力を存分に感じてきたでしょうし、自分自身が活性化される醍醐味を味わってきたと思います。その種生物学会が次代を担う若手の激減、つまり今、「学会の高齢化」という局面に立たされています。そこで種生物学会総会において画期的な提案がなされ、承認されました。

◎「学生会員の初年度は会費を3,000円にする」

●まるで語学スクールのような広告ですが、中味の充実度のお得感はケタ外れのものです。名実ともに国際誌となった英文誌が毎年3冊手元に入ります。若手にとって国際的な研究レベルを目にすることで研究・投稿意欲の刺激は非常に強力です。さらに今年からは、書店店頭にも並ぶ単行本（だいたい3000円以上になる予定）が同じ中味で和文の学会誌として配られます。これだけでも初年度学生会員の会費が破格だと思っていただけたと思います。会員2年目より従来の学生会員会費の5,000円になりますが、2000年度に行なわれる一般会員の会費値上げには運動せず据置が決まっています。

●ともかく学生会員として登録できる方は、まず1年、会員になってみてください。研究指導に携わっている方はどうか学生の方にお奨めください。1年目は文句なくお得です。それからの継続は受け取った雑誌などから判断いただき、来年度（1月はじまり）になる前に御返答ください。何も御連絡がない場合には自動的に継続になります。

●ちなみに昨年12月のシンポジウム（総会）以降、学生会員は倍増していますので（33名増）、この革新的な設定は魅力的なものかと判断できるのではないのでしょうか。もちろん、一般会員の勧誘の御協力もお願い致します。西野貴子

新和文誌「種生物学研究」単行本の内容（タイトルも目次も仮）

## 花生態学の最前線～美しさの進化的背景を探る

- はじめに・ 繁殖生物学の新たな潮流とは？  
 （繁殖生態学が解き明かす新たな花の姿）  
 松井淳・酒井聡樹（シンポのオーガナイザー・東北大学）
- 花のいのち・ 花の寿命の可塑性の進化  
 石井博（東北大学）  
 解説BOX：モデルが開く新たな世界  
 ただ眺めているだけでは理解できない！  
 酒井聡樹（東北大学）  
 解説BOX：可塑性とは何か？  
 工藤洋（東京都立大学）
- 花の性・ 両性花の自家和合性と自動的自家受粉の進化  
 丑丸敦史（京都大学）  
 解説BOX：植物の有性繁殖様式の多様性  
 様々な有性繁殖様式のなかでの両性花  
 工藤岳（北海道大学）
- 花の咲き方・ 春植物の開花結実戦略  
 西川洋子（北海道環境科学研究センター）  
 解説BOX：生活史のなかの開花・結実期  
 いつなにをしているのか？植物は。  
 大原雅（東京大学）
- 花の数・ ディスプレイサイズとポリネーターの訪花行動  
 大橋一晴（九州大学）  
 解説BOX：ポリネーターの要求。  
 昆虫の生活史から植物をながめると  
 鈴木和雄（山口県立大学）
- 花の形・ 異花柱花の進化とポリネーター  
 西廣淳（筑波大学）  
 解説BOX：植物と昆虫の様々な関係  
 川窪伸光（岐阜大学）
- 花の大きさ・ ポリネーターに適応した花の大きさ  
 小林史郎（東京大学）  
 解説BOX：ポリネーターへの適応とは？  
 井上健（信州大学）
- 花の香り・ 植物の進化と香り  
 三宅崇（九州大学）  
 解説BOX：花とは何か？  
 矢原徹一（九州大学）

メディアが電子化しつつある昨今です。にもかかわらず、紙を媒体とした雑誌編集に、僕は今、関わっています。「いずれ紙媒体は駆逐され、紙の消費は抑えられるであろう」という15年程前の予想に反し、現在でも相変わらず「紙」媒体が世の中に生き残っているせいです。また、実に皮肉なことに、我が研究室では情報加工の電子化に伴って紙消費は増えています。確かにコンピュータによるプリントプロセッシングは、ゲーテンベルクの活版印刷からすれば、大変な進歩です。が、「紙」の呪縛から、未だ物質的にも精神的にも抜けだせないのは、これ、ヒトの不器用さ

ゆえでしょうか？この前も新型のプリンターを購入してしまいました。専用紙で写真みたいに印刷するやつです。宣伝曰く「速くて、きれい。」これってつまり、単位時間・面積当たりの紙消費とインク消費の拡大増進ですかね？小説的世界にも似たTVゲームのストーリーは紙から見事に脱却しました。でもこれは、紙で

は実現できない世界をゲームに組み込んだからです。さて、出版物はどうでしょう？将来、紙のように薄くて軽いディスプレイ装置が発明されても、紙からの脱却は無理である気がしています。ゲーム界と同様に、ディスプレイでしか表現できない世界が出版界にも登場し、それが完全に支持され、印刷物を凌駕

しない限りは。僕はニュースレターを「紙」で発行しているから言うのではありませんが、「紙」を好むヒトの不器用さを、わりと気に入っています。得意の自己合理化の匂いがしますが。さて、さて、このニュースレターは前号から新体裁となりました。試行錯

誤しながら紙面を作っていますが、学会をより身近に感じていただくために、これからも工夫していくつもりです。今回のカットは岐阜大学生の安立美奈子さんの作品です。御協力ありがとうございました。

御意見、御要望などありましたら、ぜひお聞かせください。                      かわくぼのぶみつ

編集後記

# SSSB News Letter

編集兼発行人：501-1193 岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学農学部多様性生物学 川窪伸光  
kawakubo@cc.gifu-u.ac.jp  
印刷所：岐阜市 岐阜プリント  
発行：812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学理学部生態学教室 種生物学会